

戦後日本における「冒険」の賛否に関する言説分析
—堀江謙一によるヨットでの単独無寄港太平洋横断
(1962年) を事例として—

Discourse Analysis of the Positives and Negatives of
Adventure in Postwar Japan:
The Case of Kenichi Horie's Non-stop Solo Yacht Voyage
Across the Pacific (1962)

高井 昌史
Masashi TAKAI

1. 問題の所在：海外渡航解禁前（1964年以前）の冒険・探検

到着以来、この青年はすっかり英雄あつかいにされている。… [中略] …堀江君よ、早く帰国したまえ。君自身のために。まだ思出が甘美なうちに去りたまえ。君のやってのけた航海は、十分、一冊の本になる値打ちのあるものだ。だが、決してその上に君の将来を築き上げるようなものではない。… [中略] …みんなが君の話にあきたのだ。脚光を浴びた人物の歩む道はみんなそんなものだ。だから帰りたまえ、若者よ¹。

これは1962年、著名な文芸評論家である江藤淳が、冒険家の堀江謙一を批評した文章である。ちなみに江藤は、堀江が太平洋横断直後、サンフランシスコ滞在中に堀江と対談し、それを受けてこの文章を書いている。当時の江藤は、同年に新潮社文学賞（1962年）を受賞するなど新進気鋭の文学者だったが、堀江謙一に対してはかなり厳しい言葉を浴びせている。

周知のように、堀江は1962年、ヨットでの単独の無寄港太平洋横断（兵庫県西宮市からアメリカ・サンフランシスコまで）に初めて成功し、世間をにぎわせた人物である。この翌年には「菊池寛賞」（1963年）を受賞し、その後も実に半世紀以上にわたって数々の海洋冒険を成功させ、2011年には内閣総理大臣賞を受賞した。さらに、2022年にはまたしても、単独無寄港太平洋横断（アメリカカリフォルニア州にあるゴールデン・ゲート・ブリッジから、和歌山県の日ノ御埼まで）を成功させ、世界最高齢での記録（83歳）を樹立した。したがって、2020年代から振り返るならば、結果的に江藤の堀江評価は的を射ていなかったともいえよう。なぜならば、堀江の1962年の航海は「決してその上に君の将来を築き上げるようなものではない」という江藤の指摘をみごとに裏切り、堀江はまさにその航海

の上に冒険家としての将来を築き上げたからだ。

しかしながら、ここで重要なのは江藤の予想が外れていたという事実ではない。堀江を含め、多くの冒険家・探検家と呼ばれる人々は、あるときは高く評価され、またあるときは痛烈な批判を浴びることもあった。例えば、あの国民栄誉賞を受賞した植村直己ですら、彼の冒険に対して数々の批判があった（詳しくは、高井 2022を参照）。堀江についても決して例外ではなく、当時は堀江の冒険を称賛する人々がいる一方で、江藤の発言も含め、さまざまな堀江批判も散見された。戦後史の中で、冒険に対する多様な角度からの論点や価値観が入り乱れ、さらにそれらが変化していく過程において、現在の堀江に対する評価が形成されたのである。では、なぜそれほどまでに、1960年代の堀江に対する評価は錯綜していたのだろうか。本論文では、1960年代に堀江の航海が語られた際の言説（ジャーナリズム、文化人、一般人など）に注目し、どのような「称賛」あるいは「批判」の論拠が登場したのかを分析する。さらにそのような多様な言説が生じた要因を、1960年代前半における日本の社会背景、大衆の意識、および当時のメディアの状況から明らかにする。

2. 1960年前後の冒険ブームと小田実

そもそも、1960年前後の日本はまだ海外渡航が自由化される前の時代（海外渡航が原則的に解禁されたのは1964年）だったが、少しずつではあるが若者たちの冒険記が現れ、出版界でも存在感を示しつつあった。代表的なものとして、北杜夫の『どくとるマンボウ航海記』（1960年。のちに1965年に新潮文庫・角川文庫、1973年に中公文庫から再版）、小澤征爾の『ボクの音楽武者修行』（1962年、音楽之友社。のちに1980年に新潮文庫）などが挙げられるだろう。そのなかでも、最も社会にインパクトをあたえたのが、小田実の『何でも見てやろう』（1961年、河出書房新社。のちに1965年に「改定版」としてあかね書房より再発刊、1973年に角川文庫より、1977年にちくま少年文庫より再版。その後も他の出版社から再版を重ねる）だった。

山口誠は、当時次々と発刊された若者の冒険物語について、次のように指摘している。

大ベストセラーとなった小田の『何でも見てやろう』をはじめ、彼らが1960年代に著した物語には、それ以前のエリート視察記とは決定的に異なる、独特な色調があった。それは、海外で見聞きした文物を描くことよりも、旅立つ動機や出国までの手続き、そして現地での奮闘を中心的に書くことで、冒険記として自らの体験を語ったことにある。そうした60年代の冒険記には、上述した50年代の探検記とのあいだにも質的な違いが観察できる。50年代の探検記は、政府や大学や新聞社などによる組織的支援を受け、探検隊や登山隊を編成した団体渡航の成果であるのに対し、60年代の冒険記は自らの個人的動機から渡航を試み、ひとりで海外を旅する若者のモノローグだった²。

山口が指摘しているように、小田を中心とした1960年ごろの冒険記に特徴的なのは、「個人的動機」および「ひとりで海外を旅する」という点である。それらの冒険は、1950年代に行われていた学術探検と比較して、冒険を行うそもそもの目的や、その組織体制が明らかに違っていただ。小田は東京大学出身で、1958年に米国のフルブライト基金を利用してアメリカにわたり、その流れで世界を股にかけた冒険を行っていた。

もちろん、小田の著書を「海外冒険記」あるいは「旅行記」として、読み物という観点から純粋に評価することも可能だろう。小田は『何でも見てやろう』の冒頭で、次のように述べている。

ひとつ、アメリカへ行ってやろう、と私は思った。三年前の秋のことである。理由はしごく簡単であった。私はアメリカを見なくなったのである。要するに、ただそれだけのことであった。それ以外に言いようがない³。

この書き出し部分だけを素直に読めば、小田もののちに述べる堀江のように、純粋にアメリカという国を体験したいという気分に駆られた青年と解釈できるかもしれない。だが、それ以降を読み進めれば、小田が抱いていた本来の目的が明らかになる。

先ず大上段にふりかぶって言えば、もっとも高度に発達した資本主義国、われわれの存亡がじかにそこに結びついている世界の二大強国の一つ、よかれあしかれ、われわれの文明が到達した、もしくは行きづまったその極限のかたち、いったいその世界がガタピシいっているとしたら、どの程度にガタピシなのか、確固としているなら、どのくらいにお家安泰なのであるか、それを一度しかとこの眼でたしかめてみたかった、とまあそんなふうに言えるであろう⁴。

おそらく、『何でも見てやろう』全体の記述から判断するに、上記のほうが小田の本音であったと解釈できる。では、小田本人は自身の著書の意義について、著書発刊後、どのように語っていたのだろうか。小田は、朝日新聞でのインタビューで次のように述べている。

——この本で、いちばん書きたかったことは？

小田：「日本のインテリが持っている、西欧に対するへんてこな劣等感と、アジア・アラブにたいするへんてこなあこがれを、ふっとばしたかった。ギリシャで、『タイム』の表紙に岸信介の顔がのっているのを見たときは、やはりなつかしかったです。が、帰ってみると岸信介にはむかむか腹が立つ。この、なつかしい気持ちと、むかむかする気持ちの、どっちも大切だと思うんです。自民党のおっさんたちとはちがった私なりの愛国心は大事にしたいですね」⁵

小田が仮想敵としていたのは、「日本のインテリ」（西欧に対する劣等感と、アジア・アラブにたい

するあこがれを持つ」と、「自民党のおっさんたち」の両方だった。いわゆる、左派と呼ばれる前者、および右派と呼ばれる後者とも距離をとったうえで、「私なりの愛国心」を大切にしていきたいと考えていたのだ。これは、左派右派のいずれにもくみしないという、いわば比較的新しいポジションともいえるだろう。

一方で、いわゆる「日本のインテリ」（主に左派）は、小田の冒険をどのように受け止めていたのだろうか。『何でも見てやろう』について、例えば以下のような評価がある。

桑原武夫（京都大学教授）

「体内に「西洋」をもつ戦後世代はスマートな欧米にはびくつかぬが、アジアのどろんこの現実の中に新鮮な衝撃をうける。日本の未来の進路を明示するところは面白い。主体的な世界現代思想講座だ」⁶。

吉田秀和（音楽評論家）

「これは「世界における日本」を象徴する旅行記だ。米国は百億の金を費して世界中から嫌われ、（敏感で楽天的な）日本の青年はろくに元手もかけないで大陸から大陸へと、痛快で有効な冒険をつづける」⁷。

堀田善衛氏（小説家）

「世界最悪の都市カルカッタの舗道で寝た小田君は、そのとき若い日本人としては最も高貴な乞食であった。垢だらけの彼が世界の底辺から身に食い込んだ垢として持ち帰った結論は、将来の日本のための、その希望のための、最も重要な諸条件となろう」⁸。

桑原武夫、吉田秀和、堀田善衛など、いわゆる岩波知識人や社会運動家たちは、小田の冒険あるいは著書をそろって高く評価した。だが、評者たちにとって小田の海外体験は、小田が意図したような「私なりの愛国心」をもった者の行動というよりも、どちらかといえば、「主体的な世界現代思想講座」あるいは「将来の日本」に役立つもの、言いかえるならば、社会における「教養」と考えられていた感が強い。すなわち、社会（アメリカ、アジア、日本、人種問題、貧困、イデオロギーなど）を問い、主体的な思考を養い、若者（読者）たちが「教養」を身につけるきっかけになるには絶好の著書とされていたのである。

小田の著書である『何でも見てやろう』は、決してテレビドラマ化、映画化されることがなかった。その点からも、スリル溢れる旅行・冒険記というよりも、「教養」、さらにいえば「活字的教養」としての位置づけがうかがえる。その点では、1950年代からの「学術探検」との連続性もみられる。小田の冒険には学術的に（とくに自然科学の分野で）新たな発見があるわけではないが、「人間社会に役立つもの」として、広義では意味のある冒険だと考えられたわけだ。一方で、翌1962年、小田とは完全に違った方向性の冒険が行われ、社会的に大きな注目を浴びることになる。

3. 堀江謙一の太平洋単独無寄港横断とその是非論争

【堀江をめぐる論争の登場】

1962年、上記の小田実と全く別タイプの冒険を決行したのが、海洋冒険家の堀江謙一である。堀江は1938年、大阪市に生まれ、関西大学付属高等学校を卒業する。勉強があまり好きではなく大学へは進学しなかったが、高校時代からヨットを愛する青年だった。既述のように、堀江は1962年5月12日、兵庫県西宮市から小型ヨットで出国し、アメリカ・サンフランシスコまで単独無寄港で到着することに成功した。その詳細は、同年に『太平洋ひとりぼっち』（文芸春秋新社。のちに1965年に「改定版」としてあかね書房より再版、1973年に角川文庫より再版、1977年にちくま少年文庫より再版。その後他の出版社から再版を重ねる）として発表された。さらに翌1963年には、石原プロモーション製作、石原裕次郎主演で映画化もされている。映画のタイトルは著書と同一で、『太平洋ひとりぼっち』だった。

では、堀江がヨットで出国してから、サンフランシスコに到着するまで、さらに日本へ帰国した際、新聞や週刊誌などのジャーナリズム、あるいは日本の文化人たちは、堀江の行動をどのように評価したのだろうか。この件に関する詳細は、本多勝一の『冒険と日本人』（二見書房、1968年）で詳しく紹介されている。本多によると、堀江が出国した当初、ほとんどの新聞は日本の海上保安庁の見解を重視し、「人命軽視の暴挙」（無謀）、「不法な密出国」（ビザなし）として、批判的に報道した。万が一、堀江が無事にアメリカへ到着したとしても、堀江は不法入国者として米国で逮捕される、という論調だった。だが、サンフランシスコに到着した堀江は、太平洋を単独で横断した英雄としてアメリカで大歓迎され、サンフランシスコの名誉市民となった。このアメリカ側の反応を受けて、日本の新聞社はアメリカでの堀江評価を逆輸入し、堀江を称賛する方向へ舵を切り、「英雄・堀江謙一」として持ち上げていったのだ。

一方で、日本の知識人やジャーナリズムの間でも、堀江について、肯定する立場と否定する立場で論争が起こる。堀江を否定的にとらえた人物の代表格として、文芸評論家の江藤淳が挙げられる。サンフランシスコで堀江と対談した江藤は、「堀江君における人間の研究」という文章の中で、冒頭に次のように述べている。

もともと、私は冒険というものにあまり興味がない。冒険というなら、人生そのものがつねにスリルに満ちていて、危険のタネにはこと欠かない。何を求めて海や山に行くことがあるのだろうか。しかし、そうはいうものの、冒険家というものがどんな顔をしているのか、この目で見ておきたいという人並みの好奇心もないわけではない⁹。

そもそも江藤は冒険というものに理解がなく、堀江のような行動を否定的にとらえているのは明ら

かだった。では、具体的にはどのような理由で堀江を批判したのだろうか。

【冒険家の人格という論点】

第一に、江藤の批判の矛先は、堀江の冒険というよりも、堀江の人間性そのものに向けられている。やや長文になるが、以下はその引用である。

堀江謙一君は… [中略] …自分が主人役であることをよく心得ていて… [中略] …愛想よく笑いかけた。その目の光かたが尋常ではない。というか、顔は笑っているが、目は笑わずにすばやく相手の値ぶみをしている感じである。… [中略] …ウワサのひとつは、ある新聞に手記発表の独占契約をしながら、前言をひるがえして数社と次々に契約し、その権利を高く売ろうとしたというのである。もうひとつは、写真の二重売りをしかかって、領事に忠告されて思いとどまったというのである¹⁰。

彼が決して答えたがらないのは家族についてで、そのことは逆にこの青年が時折見せる暗い表情が、家庭的な不幸に根ざしているかも知れないという推測を可能にする。ヨットに入れあげていた青年は、おそらく勉強もせず、余計な金をつかいすぎるので、いつも父親のきげんをそこねていたであろう。母親は反抗的な息子を半ばあきらめ、まさか太平洋横断などはすまいと高をくくっていたにちがいない。… [中略] …こういう青年は戦後の日本にいくらでもいる。彼らは漠然と大人に不信を抱き、漠然と反抗する。… [中略] …不信はそれほど深いのである¹¹。

「すばやく相手の値ぶみをしている感じ」「写真の二重売り」など、江藤は堀江の冒険そのものではなく、彼の行動から推察した「堀江の人格」を否定している。とくに「家庭的な不幸」などは、完全に江藤の憶測にすぎないし、さらに「漠然と大人に不信を抱き、漠然と反抗する」という、当時の一般論的な若者批判にまで飛躍させている。

もっとも、堀江の人間性に対する懷疑は、実は同年の11月に帰国する際にも、週刊誌などをにぎわしていた。マスコミへのインタビューでの対応の悪さや、英雄気どりなど、江藤とほぼ同様の観点からの批判的記事も散見された。そのような状況に疑問を呈したのは、作家の三島由紀夫である。

太平洋横断をした青年が、何で英雄気取になってはいけないのか。かういふことをした青年が、凡庸な世間の要求するイメージに従って、顔をポツと赤らめて頭を掻いたりする「謙虚な好青年」でなければならぬ義務がどこにあるのか。又世間がどうしてそんなものを彼に要求する権利があるのか。……考へれば考へるほど、腑に落ちないことだらけである。大体、青年の冒険を、人格の表徴（ひょうちょう）とくっつけて考へる誤解ほど、ばかばかしいものはない。ヨットで九十日間、死を賭けた冒険をして、それでいはいゆる「人間ができる」ものなら、教育の問題など

は簡単で、堀江青年はこの冒険で太平洋の大きさは知ったろうが、人間や人生のふしぎさについて新たに知ることはなかったらう。そんなことは当り前のことで、期待するはうがまちがってゐる¹²。

三島が主張しているのは、冒険家をその「功績」ではなく、「人間性」で評価することの無意味さである。高度成長のさなかにあった当時の日本では、大衆からみれば、冒険家というものも「消費の対象」のひとつだったという見方はできよう。D・ブーアスティンは、グラフィック革命以降、かつて「英雄」と呼ばれたような功績のある人間が、単なる「有名人」へと変化していくという議論を展開した¹³。本論考の冒頭にあげた江藤の文章は、ブーアスティンの議論に重なるような論調である。ブーアスティン自身も、「英雄から有名人へ」の具体的な事例として、皮肉にも同じく冒険家のC・リンドバーグを挙げている。

一方で、三島の議論は、そういった人物の人格的表徴よりも、あくまでやり遂げた壮挙に焦点を置いており、「何で英雄気取になってはいけないのか」と、堀江を受け止める側の大衆の意識に疑義を呈しているのである。当時の堀江は、「優れた冒険家は人格者でなければならない」といった、のちに国民栄誉賞を受賞する植村直己のようなイメージを期待されたのかもしれない。いわば、「謙虚な英雄」というメディアの言説である。だが、三島はそのような世間の期待を疑問視し、「堀江青年はこの冒険で太平洋の大きさは知ったろうが、人間や人生のふしぎさについて新たに知ることはなかったらう。そんなことは当り前のことで、期待するはうがまちがってゐる」という、真つ当な指摘をしているのである。ちなみに、1980年代には、冒険を「人間性」や「教育」と強く結びつける時代がやってくるのだが¹⁴、三島の問題提起はそれを先取りしたものとも言える。

【真正性への懐疑】

第二の論点として、江藤は次のように述べる。

さらに奇怪なのは、持っていると称する航海日誌を、だれひとりとして見たものがなく、いくら頼んでもいつもヨットのなかに入れてあるというきりで、見せようとしないうのである。ここらあたりから、ジャーナリストの間には、はたして堀江君が本当に太平洋を横断したのだろうか、という思惑をいただくものすらあらわれ出しているらしい¹⁵。

江藤は「航海日誌の有無」という事実が非常に重要であると主張し、そこに堀江批判の根拠を見出している。実は他の週刊誌などにも、この点を指摘した記事は多い。もちろん、航海日誌の存在そのものが、冒険が実際に行われたことの証明になるわけではない。だが、ここで問われているのは堀江の航海が果たして本当に行われたものなのかという、いわば冒険の「真正性」である。実は、この批判の論点は海洋冒険に限ったものではなく、登山や極地探検など、冒険・探検に関する疑義として歴

史的に古くからしばしば語られてきたものでもある。ちなみに、のちに堀江が1973年から1974年に成功させた冒険（ヨットにて、西回り単独無寄港世界一周に成功。淡路島の生穂港を出発し、275日間かけて、大阪の忠岡港に到着）について、石原慎太郎も航海日誌の有無の視点から批判している。このタイプの批判がいかにかオーソドックスで、普遍的なものかがうかがえるだろう。

だが、この論点は堀江が『太平洋ひとりぼっち』を出版した時点で、消滅することになる。

【「教養」としての冒険という評価軸】

第三に、江藤は現地の新聞のコラムを引用する形で、まだサンフランシスコに滞在していた堀江に、次のようなメッセージを送っている。

帰りましたよ、若者よ。もし、この国に来たいのだったら、何年かのちにもう一度やって来たまえ。… [中略] …ただ、もっとしっかりした基礎をつくってからにしたまえ。英語をよく勉強し、あのフラッシュランプのないところで、自分がなにをしたいのかをじっくり考えてから来たまえ¹⁶。

江藤がかなりの上から目線で堀江に求めていたのは、「しっかりとした基礎をつく」こと、「英語をよく勉強」すること、「自分がなにをしたいのかをじっくり考え」ることなどである。端的にいえば堀江の冒険を、考えのなさ、語学力のなさ、さらにいえば「教養のなさ」という点から否定しているに他ならない。冒険家に対する評価の軸としては不可思議と思われるかもしれないが、これは前年の小田実の冒険に対する評価を参考にすれば、非常に理解しやすい。一年前に出版された『何でも見てやろう』にくらべれば、堀江の冒険は決して日本の社会の変革に役だつわけでもないし、「主体的な世界現代思想講座」と呼ばれるものでもない。もともと冒険に理解がない江藤にとって、堀江の冒険は何の知的好奇心をみたすものでもなかったのだ。

そもそも、東京大学出身で世間的にはエリートとみなされる小田実と、大学進学をせずヨットに打ち込んだ堀江を比較することに無理があるともいえる。いくら両者が「個人的動機」に基づいた冒険を行ったとはいえ、両者の冒険には大きな質的な差異があることは否めない。ただ、当の堀江本人も、このことには十分に自覚的だった。

なん百回……いや、ひょっとすると、なん千回かもしれない。あれ以来、ぼくはどんなに、おんなじ質問ばかり、くりかえされたことだろう。人は口を開けば、きまって、「きみが太平洋をわたった？ 動機は？ ……理由は？ ……目的は？」と、まずこうきた。… [中略] …ぼくは、そのたんびに弱ってしまった。これといって、いうことがないものだから、「わたりたいから、わたったんですよ」。正直に、本音を吐いた。これで、ぜんぶなのだ。動機も、目的も、すべては太平洋をわたることズバリにつきる。しかし、このいちばん切実な気持ちを「なるほど」と、飲みこんでくれる人は、ひとりもいなかった。… [中略] …「わたりたいから、わたった」。こんな単純

な気分が、どうしてわからないんだろうと、ぼくはふしぎだった¹⁷。

【「永遠の青年の姿」とトランスメディア】

では、このような堀江の冒険、それについての自身の言動、あるいはのちに出版した著書『太平洋ひとりぼっち』などに関して、他の知識人たちはどのように評価したのだろうか。作家の小林秀雄は、1962年12月に出版された『太平洋ひとりぼっち』について、次のように述べている。

今の世代を表現した代表的文学は何かと問われても返答はむづかしいが、今日の青年文学なら、直ちに挙げる事ができる。堀江謙一「太平洋ひとりぼっち」である。…[中略]…この青年の行動を、ジャーナリズムは三十七年度（昭和：筆者挿入）十大事件の一つに数えたが、「太平洋ひとりぼっち」という本が現れれば、これは全く別事だ。彼のヨットは記録を作ったが、彼の本は青年を現したのである。私は、この本を三十七年度の文学的一事件だ、と思っている。彼が、この本で、不馴（な）れな言語的表現を用いて、おそらく期せずして現し得たものは、永遠の青年の姿である。…[中略]…なるほど青年は皆面白い。だが、自分の力で自分の若さをしっかりつかんでいる青年は、もっと面白いはずではないか。堀江青年の文章の発想には、だれにも見誤る事の出来ぬ一つの性質がある。それは、自分には功名心も無論あったが、それより自分はヨットが好きだったという事の方が根底的な事であった、という主張である。彼には、どうしても、それが主張したかったというところが、まことに面白い。…[中略]…要するに何一つ突飛な事をした覚えはない。だが、世間は、何百回、いや何千回となく、太平洋横断の動機は、理由は、目的はと聞いた。この青年は、あたかもこう言っているようだ。世間は新事件と新理論を捜している、青年など必要としていないのではなからうか、と¹⁸。

小林は堀江謙一についてについて高く評価しているが、それは堀江の冒険に対してだけではない。いわば、航海の成功、堀江のメディア露出、人間性、著書の出版などを含めた「堀江青年現象」について高く評価しているのである。それは以下の三点に集約できる。

第一に、「自分の若さをしっかりつかんでいる青年」が、太平洋横断に成功したという壮挙である。とくに「青年」という言葉に力点を置き、「青年を現した」「堀江青年」など、「青年」の持つ肯定的な意味にこだわりを込めている。第二に、「自分はヨットが好きだった」から太平洋横断を実行したという、純粹かつ明快な主張である。特別な「理由」「目的」を持っていたわけではなく、自分の気持ちに実に忠実だったことが、「永遠の青年の姿」としての称賛とも関連しているのだろう。第三に、「不馴れな言語的表現を用いて」この冒険を『太平洋ひとりぼっち』という書物として文章化したことである。それを「昭和三七年度の文学的一事件」と高く評価しているのだ。

そもそも、「青年」（「若者」も同様であるが）の在り方や特性とは、良くも悪くも両義的なイメージでとらえることが可能である。プラスイメージで言うならば「勇気」「純粹」など、マイナスでは「無

謀」「無教養」などである。江藤があくまで堀江を後者の認識でとらえていたとすれば、小林はあくまで前者の意味で評価していたと考えられるのだ。

この小林秀雄の論評に、強く影響を受けた人物がいる。映画監督の市川崑である。市川崑は、『太平洋ひとりぼっち』を監督として手掛けたきっかけとして、次のように述べている。

昨年八月、堀江謙一君が単身ヨットで太平洋を横断したということをニュースで知った私は、へえーたいしたことをやったもんだなアとは思いましたが、実感としてはその程度で、だから、その航海日誌みたいなものを映画化しようと各映画会社が競っていると聞いた時も、別に関心はありませんでした。それが、今年のはじめになって朝日新聞に小林秀雄氏が書かれた…〔中略〕…コラムを読んだのがキッカケで、…〔中略〕…私はバタバタと「太平洋ひとりぼっち」というものに巻き込まれてしまったのです¹⁹。

さらに市川崑は、朝日新聞に掲載された小林秀雄の長文を引用し、「永遠の青年の姿」という小林の堀江解釈を参照したうえで、次のように述べている。

いろいろと教えられる言葉でもありました。というのは、とにかく近頃若い人々が問題にとりあげられる場合、世代的な観点から論じられるのが一種の抜きがたい流行のようになっていて、そのことに漠とした、しかし強い抵抗を感じ続けて来たからでした。早速「太平洋ひとりぼっち」を購入して読みました。この本から、…〔中略〕…生への非常な信頼というものが、強く感じられました²⁰。

市川崑は、「若い人々が問題にとりあげられる場合、世代的な観点から論じられるのが一種の抜きがたい流行のようになっていて…〔中略〕…強い抵抗を感じ続けて来た」と語っている。これは、常に世代というモノサシで現代の若者を一般化し、それを理解したような気になっている社会への強い違和感に他ならない。そして、小林が尊重したような「永遠の青年の姿」という、世代論に還元されないようなロマンに共鳴し、堀江が壮挙を成し遂げた根源である「生への非常な信頼」に感銘を受けたのだ。

このような流れの中で、1963年、映画『太平洋ひとりぼっち』は、主演・石原裕次郎、監督・市川崑で製作され、公開された。この作品は、石原裕次郎が社長を務めた「石原プロモーション」の製作映画第1号で、裕次郎と市川崑の主演・監督のセットは、後にも先にもこの作品のみである。この作品は大ヒットし、同年のキネマ旬報ベストテンで第4位となった。さらに、1963年の「芸術祭賞」をも受賞している。

映画『太平洋ひとりぼっち』について、映画評論家の井沢淳は次のように評している。

別に社会性を持った作品でもない。一人の青年が今日の日本において、どういう考え方をして、

どういう結果から、こんな行動に出たかを分析しているのでもない。そういう分析をしたところで、この壮挙は説明がつくものではないと映画はいいたげである。市川崑という作家にとっては、この行動の結果がおもしろいのであって、そこから社会性とか、今日の青年をみちびき出すことは無意味とも思えたのだろう²¹。

井沢が指摘しているように、この作品は堀江青年が冒険を行った動機や目的、あるいは彼の考えを表現しようとしたわけではない。むしろ、そんなことをしても「この壮挙は説明がつくものではないと映画はいいたげ」だったのである。「市川崑という作家にとっては、この行動の結果がおもしろいのであって、そこから社会性とか、今日の青年をみちびき出すことは無意味とも思えたのだろう」とあるように、市川崑も映画の中で「堀江青年」を分析したのではなく、「永遠の青年の姿」を描き出したのだ。時系列的にいうならば、堀江が書いた著書が小林秀雄による堀江青年評価を生み出し、さらにそれが市川崑の表現力へと受け継がれ、結果として市川崑の作品が多くの大衆に支持されたのだ。これは、マスメディアの報道や論評（新聞、雑誌）から堀江の著書へ、さらに映画へと移り変わっていった「トランスメディア的現象」である。その最終的な行きつく先は、大衆が堀江の冒険に抱いたロマンだったに他ならない。

当時の日本社会は、戦後復興期から60年安保を経て、池田勇人の「所得倍增計画」に代表されるような、経済成長中心の「戦後型政治」への移行期だった。社会学者の見田宗介は、戦後日本社会を分析する際、1960年代の前半を「あたたかい夢」の時代と名づけた。見田によると、この時代は「戦争と敗戦と急激な経済復興という激動の歴史のあとで、もうこの国には基本的には何事も起こらないのではないか」といった、幸福な終末の感覚があった」という²²。堀江の冒険が結果的に、「永遠の青年の姿」というイメージで肯定的に語られたのは、当時の日本の社会意識が反映されていたのかもしれない。

4. もうひとつの堀江評価

だが一方で、堀江を称賛した言説の中で、小林秀雄や市川崑とは別の観点からの評価も存在した。それは、「青年」のイメージでもなければ、冒険の「真正性」、あるいは堀江の人間性を問題にしたものでもない。ここでは、本多勝一による堀江の評価に注目してみたい。本多は、朝日新聞記者という肩書にほかに、冒険家・探検家という側面もある。『カナダ・エスキモー』（朝日新聞社、1963年）、『冒険と日本人』（二見書房、1968年）など、冒険に関する著書を多数執筆しており、日本初の大学探検部である「京都大学探検部」の創設者でもあった。当時の本多は、堀江の航海の成功だけではなく、同時期に同じように太平洋を単独で横断しようとして失敗に終わった金子健太郎についても言及し、彼らの冒険について論じている。

堀江謙一が日本から出発することに成功したわずか3か月前の2月18日、金子健太郎という当時25

歳の青年が、千葉県九十九里浜を出航した。目的は堀江と同じく、太平洋横断である。金子はヨットではなく、ドラム缶を束ねたイカダで太平洋を渡ろうとしたのだが、海岸から30キロ沖まで出たとき海上保安庁の巡視船につかまり、「出入国管理令違反」として逮捕され、半月ほど収容所で拘留された。金子の冒険を阻止したのは広大な太平洋ではなく、あくまで日本の海上保安庁だったのである。

本多は、太平洋横断に成功した堀江や海上保安庁に阻止された金子の行動を、ともに高く評価した。そして、冒険家にビザを出そうとしない日本政府や、海上保安庁による規制など、日本の官僚機構的な構造を徹底的に批判する。そして、冒険を許さないような日本の風土こそが、ヨーロッパから日本が遅れている後進性に他ならないと主張する。本多は以下のように述べている。

非冒険族が冒険族を全然尊重しない社会。これは非冒険的カルチュアということができる。それを象徴するように、非冒険的思考の牙城たる官僚から池田勇人や佐藤栄作のような首相が続出する。明らかに冒険族だったチャーチルが首相となるイギリス、冒険族の権化のようなマルローが文化相になるフランスなどとは、きわめて対照的なカルチュアである²³。

本多が批判するのは、「冒険」に対する不寛容な政治家や官僚組織の価値観、およびそれによる日本の後進性だけではない。それに加え、本多は堀江や金子のような冒険の中に、「革命」の可能性を見出す。

冒険は、独裁権力にとっては危険な傾向に結びつくものです。世の中が多少なりと変わってはいけないのです。冒険は創造に通じ、創造は変革、変革は革命につながってゆきます。一般民衆が、役人の転任あいさつのリフレインとなっている言葉のように「大禍なく」いつまでも同じ状態でおとなしくしていることこそ、エスタブリッシュメントには望ましいことなのです²⁴。

本多にとっての「冒険」とは「創造」であり、さらに「変革」「革命」へとつながり、支配層にとっての脅威となりうるものだった。すなわち、冒険の本質を「反権力」や「反体制」といった、極めて政治的なものとしてとらえ、そのうえで評価したのだ。

もちろん、堀江や金子には、自身が冒険をする上で「反権力・反体制」という意識はまったくなかった。そこにあったのは、堀江の言葉をそのまま借りるならば、太平洋を「わたりたいから、わたった」という極めて単純な動機である。しかしながら、本多は彼らの行動に着目し、彼らの「意識」にではなく「原理的に」潜んでいた「政治性」を読み取り、その観点から彼らの冒険を評価したのだ。その根底には、本多の反権力の姿勢や、「冒険」と「革命」を結びつける個人的な発想があったのだ。

これは、堀江に浴びせられた「違法な密出国」といった批判と、表裏一体にあったものとも言える。なぜならば、海外渡航がまだ自由化されておらず、海洋冒険家にビザが下ることなど考えられなかった時代だったからこそ生じたのだ。「違法な密出国」は、反体制側からみれば、「国家権力への挑戦」

と肯定的に解釈可能だからである。したがって、本多のような堀江評価の背景には、とくに太平洋横断のような海洋冒険の場合、海外渡航の制度的困難という時代状況が大きく関連していたのだ。

5. 結論

1960年代前半における堀江謙一の冒険は、ある方面からは批判され、別の方面からは称賛された。批判する論者の論拠は、あるときは「真正性の欠如」だったり、またあるときは堀江の人間性、あるいは堀江に「教養のなさ」を読み込むことなどだった。一方で、堀江を称賛する言説のなかには、「永遠の青年の姿」というイメージが投影されていた。それは著書『太平洋ひとりぼっち』の出版、それについての高評価、著書の映画化、さらに映画のヒットという流れによってもたらされていたのだ。小林秀雄や市川崑など、堀江の冒険を肯定的に伝達する論者の中には、堀江の冒険に「永遠の青年の姿」を見出すという意味で共通点があった。すなわち、いわゆる「トランスメディア」(多メディアの横断)という状況の中で、堀江の「青年」イメージは形成され、流布していったのである。その背景にあったのは、週刊誌や新聞における堀江に関する言説、冒険の書籍化、映画化だけではない。「あたたかい夢の時代」という、1960年代前半の日本における独特の社会意識も大きな力をもっていた。

だが一方で、本多勝一のように「政治的な抵抗」「反権力」という意味で堀江を称賛した論者がいたことも忘れてはならない。その背景には、海外渡航の自由化前、あるいは海洋冒険の困難さという時代状況があったのである。

【参考文献】

- 『朝日新聞』1963年1月5日 朝刊
 Boorstin, D. J. 1962, The image : or, what happened to the American dream,= 後藤和彦・星野郁美訳 1964『幻影の時代：マスコミが製造する事実』東京創元社
 江藤淳 1962「堀江君における人間の研究」『週刊朝日』9月22日号
 本多勝一 1968『冒険と日本人』二見書房
 堀江謙一 1962『太平洋ひとりぼっち』文芸春秋新社
 市川崑 1963「太平洋ひとりぼっち シナリオ」『キネマ旬報』7月号 キネマ旬報社
 井沢淳 1963「市川崑の壮挙「太平洋ひとりぼっち」」『キネマ旬報』11月下旬号 キネマ旬報社
 北杜夫 1960『どくとるマンボウ航海記』中央公論社
 三島由紀夫 1962「堀江青年について」『中央公論』11月号
 見田宗介 1995『現代日本の感覚と思想』講談社
 小田実 1961『何でも見てやろう』河出書房新社
 小澤征爾 1962『ボクの音楽武者修行』音楽之友社
 高井昌史 2022「国民的英雄・植村直己の誕生」福間良明編『昭和50年代論—「戦後の終わり」と「終わらない戦後」の交錯』みずき書林
 山口誠 2010『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』ちくま新書

注

- 1 江藤淳 1962「堀江君における人間の研究」『週刊朝日』9月22日号 p.27
- 2 山口誠 2010『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』、ちくま新書 p.52

- 3 小田実 1961『何でも見てやろう』河出書房新社 p. 6
- 4 小田実 1961『何でも見てやろう』河出書房新社 p. 6
- 5 朝日新聞 朝刊 1963年1月5日 9頁
- 6 小田実 1961『何でも見てやろう』河出書房新社 帯
- 7 小田実 1961『何でも見てやろう』河出書房新社 帯
- 8 小田実 1961『何でも見てやろう』河出書房新社 帯
- 9 江藤淳 1962「堀江君における人間の研究」『週刊朝日』9月22日号 p.23
- 10 江藤淳 1962「堀江君における人間の研究」『週刊朝日』9月22日号 p.23-24
- 11 江藤淳 1962「堀江君における人間の研究」『週刊朝日』9月22日号 pp.25-26
- 12 三島由紀夫 1962「堀江青年について」『中央公論』11月号 p.270
- 13 Boorstin, D. J. 1962, The image : or, what happened to the American dream,= 後藤和彦・星野郁美訳 1964『幻影の時代：マスコミが製造する事実』東京創元社
- 14 詳しくは、高井昌史 (2022) を参照
- 15 江藤淳 1962「堀江君における人間の研究」『週刊朝日』9月22日号 p.24
- 16 江藤淳 1962「堀江君における人間の研究」『週刊朝日』9月22日号 p.27
- 17 堀江謙一 1962『太平洋ひとりぼっち』文芸春秋新社 pp. 1 - 2)
- 18 朝日新聞 朝刊 1963年1月5日 9頁
- 19 市川崑 1963「太平洋ひとりぼっち シナリオ」『キネマ旬報』7月号 キネマ旬報社 p.142
- 20 市川崑 1963「太平洋ひとりぼっち シナリオ」『キネマ旬報』7月号 キネマ旬報社 p.142
- 21 井沢淳 1963「市川崑の壮挙「太平洋ひとりぼっち」」『キネマ旬報』11月下旬号 キネマ旬報社 p.43
- 22 見田宗介 1995『現代日本の感覚と思想』講談社 p.21
- 23 本多勝一 1968『冒険と日本人』二見書房 p.64
- 24 本多勝一 1968『冒険と日本人』二見書房 p.289

【Abstract】

Discourse Analysis of the Positives and Negatives of
Adventure in Postwar Japan:
The Case of Kenichi Horie's Non-stop Solo Yacht Voyage
Across the Pacific (1962)

Masashi TAKAI

The adventure undertaken by Kenichi Horie in the early 1960's was criticized by some and acclaimed by others. His detractors argued that the adventure "lacked authenticity" and denied his humanity, labeling him as "uncultured." In contrast, discourse praising Horie projected the image of a "figure of eternal youth." This was a result of the progression from the publication of his book, *Kodoku: Sailing Alone Across the Pacific*, and its success, to the hugely popular movie adaptation. Hideo Kobayashi, Kon Ichikawa, and other critics who conveyed positive views of Horie's adventure shared the idea of this "figure of eternal youth" as the meaning of the adventure. In other words, the image of Horie as a young man was formed in what could be called a "trans-media" environment (existing across multiple media formats). This was informed not only by discourse about Horie in newspapers and weekly magazines, nor by book and movie adaptations of his adventure, but also by the unique social consciousness of early-1960's Japan as a "time of warm dreams."